

## フォークソノミーの新奇性はどこにあるのか

緑川 信之\*

フォークソノミーという用語はフォーク (folk または folks) とタクソノミー (taxonomy) の合成語である。Wikipedia によれば、フォークソノミーは、インターネット上での情報検索の方法論であり、協同的かつ自由に付与されるタグで構成されている。このタグによって、ウェブページやオンライン上の写真、ウェブリンクなどのコンテンツがカテゴリ分けされる。本稿では、フォークソノミーに関するいくつかの論文・記事を分析し、フォークソノミーの新奇性がどこにあるのかを明らかにした。

キーワード：フォークソノミー、タクソノミー、分類、索引、タグ付け、ソーシャルブックマーク

フォークソノミー (folksonomy) とは「フォーク (folk : 人々, 民衆)」と「タクソノミー (taxonomy : 分類)」の合成語である。Wikipedia によれば、「フォークソノミーは、インターネット上での情報検索の方法論であり、協同的かつ自由に付与されるタグで構成されている。このタグによって、ウェブページやオンライン上の写真、ウェブリンクなどのコンテンツがカテゴリ分けされる」<sup>1)</sup>。フォークソノミーに関する論文・記事はウェブ上に数えきれないほど存在する。これほど注目されているフォークソノミーであるが、新奇性 (特に図書館情報学にとっての) はあるのだろうか。本稿では、いくつかの論文・記事で論じられていることを分析し、フォークソノミーの新奇性がどこにあるのかを考察する。

### 1. フォークソノミーの受けとられ方

冒頭で見たように、フォークソノミーとは、ウェブ上のコンテンツを共有するシステム (サービス) において、参加者がコンテンツに自由に付与するタグのことである。コンテンツは何でもよく、システムの参加者が投稿した写真でもよいし、ウェブページやウェブサイトでもよい。タグを付けるのは後で探しやすく (検索しやすく) するため、一種の葉 (ブックマーク) の役目を果たしていることから、ソーシャルブックマークとも呼ばれている。

フォークソノミーは、フォーク (人々) とタクソノミー (分類) の合成語であることからもうかがえるように、「人々がタグ付けを行う」ということと、「タグ付けは分類である」ということの、二つの観点から捉えられている。

「人々がタグ付けを行う」という点については、以下のような記述がある。

フォークソノミーは利用者が生成する分類で、ボトムアップの同意によって生じる。・・・フォークソノミーは

理論あるいはトップダウンの戦略ではない<sup>2)</sup>。

・・・Timo Hannay の言葉を借りれば、フォークソノミーは「制限されておらず自由である、押しつけられたものではなくボトムアップ型である、・・・」<sup>2)</sup>。

これは、図書館の分類や索引のように専門家によってタグ付けされるのではなく、システムの参加者である「人々」がタグ付けをするのであるから、分類記号や件名標目・ディスクリプタのような統制された用語ではなく自由な用語を付与することができ、押しつけられた既存のタグではなく「人々」がボトムアップに付与するものである、ということを主張している。

また、次のような記述もある。

・・・フォークソノミーは、その利用者に、コミュニティの中でタグの個人的利用を共有することを可能にさせる。利用者は、様々なコンテンツを一つのタグの元で共有したり、一つのコンテンツに付与された異なるタグを共有する。このように、タグはお互いにリンクされており、コンテンツも同様である。こうした特徴は、フォークソノミーがタグやコンテンツのネットワークであるという理解を可能にする<sup>3)</sup>。

これは、コンテンツとタグを共有することによって、「人々」が結びつけられ、ネットワークを形成していることを述べている。

このように、「人々がタグ付けをする」という観点は、さらに、「専門家から押しつけられた既存のタグではない」という側面と、「タグの共有によってネットワークが形成される」という側面に分けることができる。

一方、「タグ付けは分類である」という観点については、以下のような記述がある。

フォークソノミーの重要な側面は、平坦な名前空間中の用語で構成されていることである。すなわち、階層が存

\*みどりかわ のぶゆき 筑波大学図書館情報メディア研究科  
〒305-8550 茨城県つくば市春日 1-2  
Tel. 029-859-1365 (原稿受領 2007.3.3)

在せず、用語間に親子関係や兄弟関係が明示されていない<sup>4)</sup>。

これは、タグ付けに使われる用語が体系化された分類表やシソーラス・件名標目表（以下、便宜上これらを総称して分類体系と呼ぶ）に基づくものではないことを述べている。

以上から、フォークソノミーは、

- ①専門家から押しつけられた既存のタグではない
- ②タグの共有によってネットワークが形成される
- ③タグは分類であるが、既存の分類体系に基づくものではない

という捉え方がされていることがわかる。

## 2. フォークソノミーの利点と問題点

では、フォークソノミーにはどのような利点と問題点があると考えられているのであろうか。まず利点としては、以下のような記述がある。

[フォークソノミーが]従来のトップダウン型の分類よりも有利なのは、精度ではなく、利用者の実際の要求と言葉に適合させる能力である<sup>2)</sup>。

おそらく、フォークソノミーの最も重要な利点は、利用者の語彙を直接に反映していることであろう<sup>4)</sup>。

これは、前章でみたフォークソノミーの捉え方①から出てくる利点である。つまり、専門家から押しつけられた既存のタグを使うのではなく、システムの参加者（人々）が自分の要求と言葉で付与したタグを検索に利用できる、ということである。

フォークソノミーの捉え方②からは、以下のような利点が出てくる。

フォークソノミーの興味深い特徴は、包括的だという点である。何も除外することなく、すべての人の語や語彙を含む。トップダウンの観点を押しつける中央の権威は存在しない。……このことから、フォークソノミーを利用すれば、周辺のトピックも見つけることができる。母集団の中の小さな断片への関心から、独創的で主流から外れたアイデアが生まれる<sup>2)</sup>。

[フォークソノミーの利点の]第一は思いがけない発見である<sup>4)</sup>。

これは、タグの共有というネットワークには中央の権威が存在しないので、システムの参加者が自由にタグを付与でき、その中には思いがけないアイデアに結びつくようなコンテンツへと導いてくれるタグもあるであろう、ということである。多くの人が自由に参加することで、アイデアの幅も広がるという考えに基づいている。

フォークソノミーの捉え方③から出てくる利点に関しては、以下の記述がある。

統制語彙を用いて専門家が開発するタクソノミーとは対照的に、フォークソノミーは体系的ではないし、情報専門家の目から見れば、洗練されてもいない。しかし、インターネット利用者にとっては、フォークソノミーはコンテンツのカテゴリ化の費用を劇的に安くする。なぜなら、複雑で階層的に組織化された用語を学ぶ必要がないからである。その場でタグを作り適用するだけである<sup>1)</sup>。

・・・フォークソノミーは本質的に自由形式であり、そのため、利用者がインターネット上のコンテンツをカテゴリ化する方法を変えたり更新したりしてもすぐに対応できる<sup>1)</sup>。

これは、既存の分類体系に基づいてタグ付けをするのではないので、分類体系の使い方や用語を学習するための時間・労力を必要としない、また、分類体系の改訂を必要としない、ということである。

一方、フォークソノミーの問題点も指摘されている。まず、フォークソノミーの捉え方①に関連する問題点として、以下の記述がある。

フォークソノミーは発見率が非常に低い。思いがけない発見やブラウジングには優れているが、目標を定めた検索には向いていない<sup>2)</sup>。

これは、付与されるタグが専門家によるものではなく、システムの参加者が自由に付与するものであるため、検索の効率が悪いということである。特に、特定の用語で検索しても、その用語がタグに使われているとは限らず、検索漏れが多くなる。

フォークソノミーの捉え方②に関しては、以下の指摘がある。

・・・、ほとんどのフォークソノミーは、メタノイズと呼ばれる特異なタグを故意に付与されてしまう。これは利用者の負担となるし、システムの情報検索能力を低下させる<sup>1)</sup>。

これは、タグがネットワークによって共有されているが故に、悪質な妨害行為も生じる可能性があるということである。

フォークソノミーの捉え方③に関連する問題点としては、以下の記述がある。

批判者によると、フォークソノミーは、正規の分類体系が排除しようとしている欠陥によって特徴づけられるという。それは、多義語（窓は穴でもありガラス板でもあるというように多数の関連する意味をもつ語）と同義語

(tv と television, Netherlands と Holland と Dutch というように同じか類似した意味を持つ複数の語、および、cat と cats というように単数・複数形)の問題である<sup>1)</sup>。

提案されたタグに階層性がない。フォークソノミーは平坦な知識空間で、自分のコンテンツ(掲示板への投稿、写真など)や他人のサイトのコンテンツを記述するタグの複雑な構造を作成している現実の人々のことを考えるのが難しい<sup>2)</sup>。

これは、分類体系を使用していないため、多義語や同義語の統制が行われれないということ、また、使用するタグには階層性が表現されていないので、特定性の高い用語と低い用語の区別がされない、ということである。

以上のように、フォークソノミーの利点は、逆に見ると問題点だとも言える。このことを踏まえて、フォークソノミーと既存の分類体系は相互排他的な関係にあるのではなく、相互補完的に利用すべきだという意見もある。

統制語彙は、タグ付けをする場合の大部分において、実際のでもないし経済的でもない。しっかりした統制語彙を構築し、維持し、施行するのは、開発の時間や利用者が分類体系を学習するのに要する時間などの点で、とても経費がかかる。言い換えると、統制語彙が活用できない場合には、フォークソノミーは何もないよりまだ、ということである<sup>3)</sup>。

ウェブ上の出版が大衆化するに伴って、目録作成も大衆化の方向へ牽引される。フォークソノミーは、従来の構造化され集中管理された分類とまったく分類・メタデータを作成しない状態との間の妥協点である<sup>4)</sup>。

これは、分類体系に基づくタグ付けの方が検索効率もよく望ましいが、経費という面からは問題があり、特にウェブ上のコンテンツのタグ付けにはほとんど適していない。しかし、分類体系が利用できないからといってタグ付けをしないのではなく、フォークソノミーという「次善の」手段がある、という主張である。

### 3. フォークソノミーという用語

フォークソノミーという用語は、情報アーキテクトの Thomas Vander Wal に由来すると言われている。すでに見たように、この用語はフォークとタクソノミーの合成語である。

フォークソノミーという用語は、フォーク (folk あるいは folks) とタクソノミー (taxonomy) を結合させたものであり、文字通り「人々の分類管理 (people's classification management)」という意味である。「タクソノミー」はギリシア語の taxis と nomos に由来する。taxis は「分類 (classification)」を、また nomos (ある

いは nomia) は「管理 (management)」を意味する。一方、「フォーク」は人々 (people) を意味する古英語の folc から来ている<sup>1)</sup>。

第1章でも書いたように、フォークソノミーはソーシャルブックマークとも呼ばれている。このソーシャルブックマークをタイトルにした論文では、その他の呼び名を列挙している。

利用者が自分でラベルを付与するという、構造化されていない(あるいはより適切には、自由な構造の)分類方法は、「フォークソノミー」「フォーククラシフィケーション (folkclassification)」「エスノクラシフィケーション (ethnoclassification)」「分散化されたクラシフィケーション (distributed classification)」「ソーシャルクラシフィケーション (social classification)」などと様々な名前前で言及されている。その他、「開かれたタグ付け (open tagging)」「自由なタグ付け (free tagging)」「ファセット化された階層 (faceted hierarchy)」なども使われている<sup>5)</sup>。

このように、同じ対象(実際には微妙にズレがあるのかもしれないが)を異なる名称で呼ぶということは、名称に用いる用語の意味範囲が異なるか、あるいは、対象の捉え方が異なるか、のどちらかである。以下に紹介するのは、まず用語の意味範囲の違いから論争が生じ、後に、論争相手の一方が対象の捉え方の違いだと気づいた例である。

まず、Merholz がフォークソノミーという用語に異議を唱える。

[フォークソノミーという用語は]不適切でもある。何が最もいけないのかというと、「タクソノミー」という語を用いていることである。タクソノミーは階層を志向しており、押しつけられたものであることが多い。タグ付けはタクソノミーを生成しない。・・・適切な用語は「エスノクラシフィケーション」であろうという考えに至った<sup>6)</sup>。

これに対して、Mathes が反論する。

Merholz は「フォークソノミー」という用語を使わない。彼は自分のウェブサイトで、この用語は「タクソノミー」からの派生語なので不適切である、タクソノミーは階層と統制を志向している、と書いている。・・・彼は「エスノクラシフィケーション」という用語を好んでいる・・・。[しかし、]エスノクラシフィケーションも不適切である。なぜなら、[クラシフィケーションもタクソノミーと同様に階層と統制を基本としており、]クラシフィケーションよりはカテゴライゼーション (categorization) と言うべきだからである<sup>4)</sup>。

この二人の論争には、タクソノミー、クラシフィケーション、カテゴリゼーションという三つの語が登場する。Merholzはタクソノミーには階層性があり統制されたものであるから、(そうではない)クラシフィケーションを使うべきだと主張している。それに対して Mathes は、クラシフィケーションもタクソノミーと同じである、階層性と統制がないという意味ではカテゴリゼーションを使うべきである、と反論している。この Mathes の反論は、Jacob の論文「Classification and categorization: a difference that makes a difference」<sup>7)</sup>を基にして、クラシフィケーションとカテゴリゼーションの違いを強調している。

これに対して Merholz は、クラシフィケーションよりもカテゴリゼーションの方が適切であることは認めつつも、Mathes が相変わらずフォークソノミーという用語を妥当とみなしていること、フォークソノミーという用語が普及し始めていることに対して、同じ Jacob の論文を基にして、タクソノミーという語を使うことの問題点を指摘している。

しかし、彼の論文のタイトルに「フォークソノミー」という語があるのを見ると、彼はこの用語にすっかり満足しているように思われる。この語はクラシフィケーションよりももっと望ましくない。Jacob の論文において、タクソノミー (この語から「フォークソノミー」が鋳造された) は「一組の普遍的な原則によって確立された任意の枠組みの中で運用されるものである」と述べられており、クラシフィケーションの部分集合としてリストされている<sup>8)</sup>。

「フォークソノミー」が受け入れ始めていることに私はいらつかされる。それは、1) 不正確で、2) 見苦しい、からである。「エスノクラシフィケーション」が不十分であることは認めよう。しかし、それでは何が残されているのだろうか。「分散化されたクラシフィケーション」のような、これまでに見た他の用語も不恰好で不正確である<sup>8)</sup>。

ここまでは、タクソノミー、クラシフィケーション、カテゴリゼーションという三つの語の意味範囲を巡る論争である。最終的に Merholz は、タクソノミーはもちろん、クラシフィケーションよりもカテゴリゼーションの方がよいと認めているが、ここで彼は、用語の意味範囲の問題よりも対象の捉え方の違いに気づく。それは再び Jacob の論文に示唆されたものである。

Jacob は事後結合索引について論じている。・・・我々が自由なタグ付けで行っているのはまさにこれである<sup>8)</sup>。

これが私の論考のタイトル [Mob indexing? Folk categorization? Social tagging?] へと導いた。私は、「フォーク」「モップ」「ソーシャル」といった「多層の人々

(multiple of people)」を表す同義語と、「索引付け」「カテゴリゼーション」「タグ付け」といった活動の比較的正確な表現とを結びつけたい<sup>8)</sup>。

Merholz は、フォーク、モップ、ソーシャルのいずれでもよいとしており、この観点からみた対象の捉え方にはこだわっていない (最初の記事ではエスノも使用していた)。一方、タクソノミーやクラシフィケーションではなく、索引付けやタグ付けを「比較的正確な表現」と呼んでいる。ここには分類から索引へという対象の捉え方の変化が見られる (まだカテゴリゼーションという語が残ってはいるが)。

#### 4. フォークソノミーの新奇性

前章に出てきた名称で使われている語を整理すると、「フォーク、エスノ、モップ、ソーシャル、開かれた、自由な、分散化された」のいずれかと「タクソノミー、クラシフィケーション、カテゴリゼーション、索引付け、タグ付け、ブックマーク」のいずれかとの組み合わせである。

このうち、「タクソノミー、クラシフィケーション」は適切ではなく、むしろ、「索引付け、タグ付け」を使うべきである、というのが Merholz の結論であった (「ブックマーク」も「索引付け、タグ付け」に近いと言ってよいであろう)。

Merholz に言われるまでもなく、「フォークソノミー」という名前では呼ばれるものが分類ではなくむしろ索引だということは、図書館情報学関係者からみれば当然のように思える (したがって「フォークソノミー」という呼び方は適切ではないが、名前を変えるとかえって混乱するのでこのまま使うことにする)。それにもかかわらず、この造語の作成者とされる Thomas Vander Wal や Mathes (そして、気づく前の Merholz) 以外にも分類という捉え方をしている論文・記事が少なくない。もちろん、タグ付けをすることはそれを他から区別することであり、分類を行っているともいえる。また、使用されたタグを集めて分類体系を作ることにも可能である。しかし、索引付け (索引語付与) という概念があるのに、あえてタグ付けを分類と呼ぶ必要はないし、むしろ混乱を招くであろう。フォークソノミーによる分類は、索引付けの一つの応用例と考えるべきである。そういう意味では、Merholz が承認しているカテゴリゼーションも分類の一種であり、フォークソノミーを適切に表現する語とはいえない。

以上から、フォークソノミーの捉え方の③は、

③タグ付けは既存の用語体系に基づくものではない

と修正する必要がある (これまでは分類表とシソーラス・件名標目表を総称して分類体系と呼んできたが、ここではシソーラス・件名標目表だけを総称して用語体系と呼ぶ)。この③で特徴づけられるフォークソノミーには何か新奇性があるのだろうか。これも図書館情報学関係者から見れば、

新奇性は何もないことが明らかであろう。自由語による索引語付与はこれまでも様々なところで行われてきており、そのこと自体は新しいことではない。むしろ、統制語を使用する方が特殊な場合といえるであろう。

以上が「フォークソノミー」の後半の語に関連する議論であるが、次は前半の語について検討する。このうち、「フォーク、エスノ、モップ」は、いずれも「人々（民衆の）」という意味で、第1章で見たフォークソノミーの捉え方の、①専門家から押しつけられた既存のタグではない、に対応している。一方、「ソーシャル、分散された」は、②タグの共有によってネットワークが形成される、に対応している。「開かれた、自由な」は、押しつけられたタグでないという意味では①に、参加者全員に開かれているという意味では②に、そして、既存の用語体系に基づかないという意味では③にも対応している。

それでは、①で特徴づけられるフォークソノミー、すなわち、「人々によるタグ付け・索引語付与」には新奇性があるだろうか。Peterson は相対主義という考えを持ち出して、①の特徴の意義を強調している。

相対主義の哲学によってフォークソノミーは、特定の文献に索引語を付与する際に一人の索引者に頼るのではなく、様々な認識をもつ多くの利用者によるその文献を分類させることができるようになる<sup>9)</sup>。

しかし、これはそれほど大げさなことではないし、新奇性もあるとは思えない。たとえば、書店で本を買ってきて自宅の書棚に並べる場合を考えてみればよい。各自、それぞれ自分の考えに基づいて本を分類し、書棚に並べているであろう。まさに、「人々によるタグ付け・索引語付与（およびその応用としての分類）」が日常的に行われているのである。これは本に限ったことではない。人々はあらゆることに対して、常にタグ付け（名付け、ラベリング）を行っている。したがって、①の特徴もフォークソノミーの新奇性を表現するものではない。

それでは、残された、②タグの共有によってネットワークが形成される、という特徴はどうであろうか。結論から言えば、おそらく、これがフォークソノミーの新奇性を表現する唯一の特徴だと思われる。そして、これはインターネットの発展によって可能になった新しい現象といえる。

自分で集めたものにタグ付けをするだけ（つまり①）ならばどこでも行われているし、各自が集めたもの自体（コンテンツ）を持ち寄って共有することも多くの場合で行わ

れている。しかし、コンテンツを共有するだけでなく、共有しているコンテンツに各自が付与したタグも共有するのがフォークソノミーである（ここでいうタグの共有とは、自分が持ち込んだコンテンツだけにタグ付けをするのではなく、他人が持ち込んだコンテンツにも自由にタグ付けできることを意味している）。このような行為がこれまでまったくなかったかどうかはわからない（おそらく何かあるだろう）が、フォークソノミーほど体系化されたものはなかったか、あってもわずかであろう。

フォークソノミー（という名称はともかく）が図書館情報学において新奇性を持つとしたら、②タグの共有によってネットワークが形成される、という特徴によるものであり、ここに焦点をあてて注目していく必要がある。

#### 参 照 文 献

- 1) Folksonomy: From Wikipedia, the free encyclopedia. <http://en.wikipedia.org/w/index.php?title=Folksonomy> (accessed 2006.11.07)
- 2) Quintarelli, E. Folksonomies: Power to the people. Paper presented at the ISKO Italy-UniMIB meeting, Milan, June 24, 2005. <http://www.iskoi.org/doc/folksonomies.htm> (accessed 2006.11.07)
- 3) Shen, K.; Wu, L. Folksonomy as a complex network. ArXiv: cs.IR/0509072, Vol.23(2005). [http://arxiv.org/PS\\_cache/cs/pdf/0509/0509072.pdf](http://arxiv.org/PS_cache/cs/pdf/0509/0509072.pdf) (accessed 2006.11.07)
- 4) Mathes, A. Folksonomies: Cooperative classification and communication through shared metadata. <http://www.adammathes.com/academic/computer-mediated-communication/folksonomies.html> (accessed 2006.11.07)
- 5) Hammond, T.; Hannay, T.; Scott, J. Social bookmarking tools (I). D-Lib Magazine. Vol.11, No.4(2005). <http://www.dlib.org/dlib/april05/hammond/04hammond.html> (accessed 2006.11.07)
- 6) Merholz, P. Ethnoscience and vernacular vocabularies. August 30, 2004. <http://www.peterme.com/archives/000387.html> (accessed 2006.11.22)
- 7) Jacob, E. K. Classification and categorization: A difference that makes a difference. Library Trends. Vol.52, No.3, p.515-540(2004). [http://www.findarticles.com/p/articles/mi\\_m1387/is\\_3\\_52/ai\\_n6080402](http://www.findarticles.com/p/articles/mi_m1387/is_3_52/ai_n6080402) (accessed 2006.11.22)
- 8) Merholz, P. Mob indexing? folk categorization? social tagging?. January 03, 2005. <http://www.peterme.com/archives/000444.html> (accessed 2006.11.07)
- 9) Peterson, E. Beneath the metadata: Some philosophical problems with folksonomy. D-Lib Magazine. Vol.12, No.11(2006). <http://www.dlib.org/dlib/november06/peterson/11peterson.html> (accessed 2006.11.21)

**Special feature** : New and theoretical trends in library and information science. What is the novelty of folksonomy?. Nobuyuki MIDORIKAWA (Graduate School of Library, Information and Media Studies, University of Tsukuba, 1-2, Kasuga, Tsukuba-shi, Ibaraki-ken 305-8550 JAPAN)

**Abstract** : The term “folksonomy” is a compound of the words folk (or folks) and taxonomy. According to the Wikipedia, a folksonomy is an Internet-based information retrieval methodology consisting of collaboratively generated, open-ended labels that categorize content such as Web pages, online photographs, and Web links. In this paper, some articles on folksonomy were critically reviewed and the novelty of folksonomy was revealed.

**Keywords** : folksonomy / taxonomy / classification / indexing / tagging / social bookmark